

築港運動の継続と綱治の遺言(※35)

その後、留萌築港運動は明治 27、28 年 (1894、1895)

の日清戦争(※36)などがあり、表だって運動を行うことができませんでした。

しかし、綱治は仕事などで東京に出た機会に関係するところを回り、留萌に港を作ることの必要性を説明していました。

また、水産伝習所を卒業して家業の漁業を手伝っていた億太郎も、父綱治と共に北海道庁などを何度も訪ね、北海道 庁技師(※37)として小樽築港に関わっていた広井勇博士とも連絡を取りあっていました。

※35 遺言

亡くなった人が家族などに残した言葉。

※36 日清戦争

日本と清（中国）との戦争。

※37 技師

技術者の呼び名。

明治 30 年(1897)に北海道長官に就任した園田安賢は、
留萌築港の強力な応援者となり、五十嵐家と関係を深め
ていきました。

億太郎の次男安綱の名前は、園田安賢の安と綱治の綱
から名付けられたといわれています。

明治 33 年 (1900) になると、当時、留萌地方で一番大きな町だった増毛が、港をつくる運動の中で大きなライバルとして立ちはだかってきます。

増毛に築港をとられたら大変ということから、綱治をはじめ留萌の有志たちは「留萌築港期成同盟会(※38)」を作り、12 月には、帝国議会へ 2 回目の請願をします。

※38 留萌築港期成同盟会

留萌港を作るために集まった人たちの団体。

このとき初めて億太郎も実行委員となり、東京で運動を
くり広げました。

よく 翌年も第3次請願を行います。

しかし、先頭に立っていた父綱治は、明治36年(1903)
9月18日に札幌の病院で亡くなります。56才でした。

つなじ 綱治は死を悟った時(※39)、億太郎をそばに呼んで、次
のように言い残しました。

※39 死を悟った時

もうすぐに自分が死ぬと考えた時。

「わが五十嵐家は漁業を基として今日あることができ
た。みな、郷土留萌のおかげだ。自分も明治24年の帝国
議会に留萌築港の請願を町の有志と共に始めてから、土
地13万坪（約43ヘクタール）を寄附して市街地を作り、
住みよい留萌を築くように念願（※40）してきたが、病気に
は勝てない。鉄道も港湾もこれからである。お前も
すいさんでんしゅうじょ 水産伝習所を終了しているから新しい漁業をおこし、私
の考えていたことを立派にやりとげてくれ。」

この綱治の遺志を継ぎ、億太郎は留萌への築港誘致
(※41)に向かっていくのです。

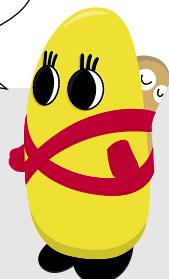
お父さんの死を乗り越えて、
活動を続けていくんだMO～！

※40 念願

ずっとと思って願うこと。

※41 誘致

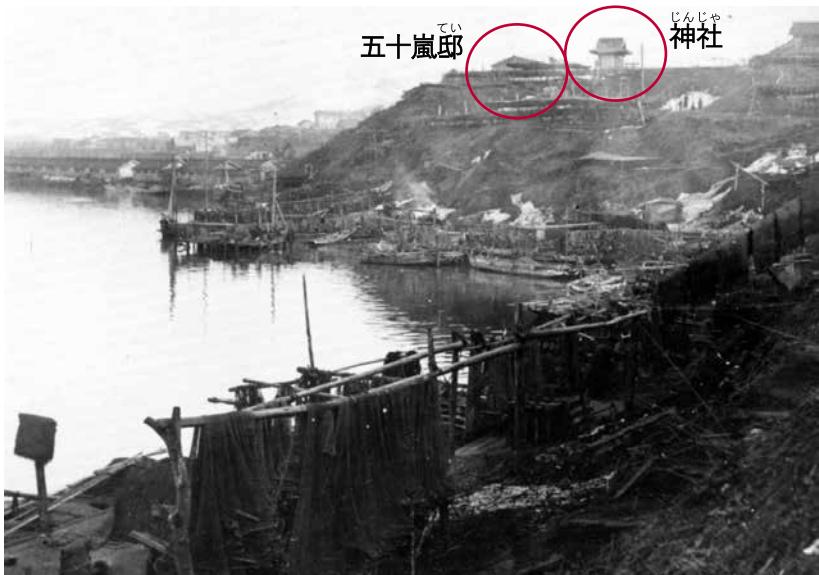
まねきよ 招き寄せること。



留萌町田明月港圖



明治 35 年留萌港明細図 めいさい す 五十嵐邸の場所がわかる てい



築港前の南岸 五十嵐邸と神社が見える



五十嵐邸前にて